

大堀總氏の拙著の書評は、以下で指摘する問題がありますので、反論権を行使して大堀氏の「書評」を批判させていただきます。

最初に大堀氏の「書評」を引用し、それに対して太字で私の反論、批判を加えるという形式で進めていきます。なお、ここには私が拝見したヴァージョンの大堀氏のテキストが、数行を除いて、ほぼ全部引用してあります。字句の書き換えはしていません。

有馬哲夫氏に関して、評者はすでに「昭和史を動かしたアメリカ情報機関 平凡社 2009年1月15日 初版」について短いコメントを、「[スイス和平工作 その後](#)」の中に書いている。

その後有馬氏は雑誌“新潮45”の2014年8月号、9月号に「スイス終戦工作 空白期間の謎 1 藤村電の真相」、「同 2 ダレスは何をしていたか」を書き、本書はこれら2つの記事がベースになっている。

そして終戦70周年の今年に出版されたわけであるが、10年前の終戦60周年に出版された「幻の終戦工作 ピース・フィーラーズ 1945夏」竹内修司著を、かなり意識した内容になっている。

何カ所かで竹内の書いている事が否定されている。そしてその頂点は終盤の「スイス終戦工作が（日本の）終戦をもたらした」という主張である。つまり

「スイスからのインテリジェンス（本書を通して説明はないが、有馬氏はこの言葉を“情報”の意味で使っていると思われる）によって、なにができて、なにができないかをはっきり認識していた東郷（茂徳外相）が、（中略）ようやく終戦にたどり着くことが出来たと言える。」と説明し最後には

「この意味で、グルーとダレス、そしてハック、ヤコブセン、吉村、北村、岡本、加瀬の終戦工作は”幻“などではなく、真の終戦工作だったのだ。」と結んでいる。

ここで”幻“という語を用いたのは竹内の著書を意識している事は間違いない。

「竹内の著書を意識している事は間違いない」とありますが、間違いどころか「まえがき」にはっきり書いてあります。短い「まえがき」ですから、お読みになったほうがいいですね。

「書評」というからには、読まないといけません。これは絶対のルールです。

もう一つルールは、匿名にははいけないということです。どこの誰かはっきりさせない

と、匿名性を悪用して誹謗中傷する類の人間になってしまいます。大堀氏と特定するのに苦労しました。

さて、インテリジェンスですが、佐藤優氏がインテリジェンスという言葉を行流行らせてから、インテリジェンスには解説が必要ないと思っていました。

インテリジェンスと情報の違いは、拙著『昭和史を動かしたアメリカ情報機関』の序章に明確に書いてあります。読まなかったのですか。読んでいけば、「インテリジェンス（本書を通して説明はないが、有馬氏はこの言葉を“情報”の意味で使っていると思われる）などとは書かなかったと思います。そもそも拙著のタイトルは『「スイス諜報網」の日米終戦工作』としてあります。タイトルにも気付いていないようですね。

ただし、お二人の著者が元にしてある情報源はほぼ同じである。たとえば加瀬俊一スイス公使が東郷外務大臣宛てに送ったポツダム宣言受入れを提言する電報を、竹内は「これが東郷の最終決断に資するところがあったのか？」と自問し、「とてもそうは思われぬ」と自答して「幻の和平工作」となっている。

一方の有馬は述べたようにこれを「イエス」ととらえて、冒頭の主張となっている。しかしながらその根拠が挙げられていない。乱暴な解釈をすれば「海外の大公使館から入る電報を外務大臣は全部に目を通していただろうし、かつ加瀬公使の意見に同意したはずである」と考えるのが根拠のようである。二人の主張を比べた場合、評者は竹内の方が誠実であると考えます。

「その根拠が挙げられていない」といっていますが拙著は「イエス」とした理由を六章から第一〇章まで計四章にわたって実証的に記述しています。

以下、書いているのに、大堀氏が不誠実にも根拠をあげてないといないとした中心部分を要約します。

7月30日以後という終戦にとってきわめて重要な時期に加瀬公使の打った、ダレス・ヤコブソン会談、ヤコブソンのポツダム宣言についての解説が、ソ連大使佐藤にも伝えられ、佐藤をして八月4日の東郷宛の電報のなかで「加瀬公使の意見を読んで感極めて深きものあり敢えて卑見を呈す」といわしめ、それが東郷と天皇をソ連の仲介をまたず、ポツダム宣言受諾による終戦へと動かしたという論を展開しています。

それを実証するため ページにまず七月二三日の東郷の加瀬宛の照会の電報を引用しています。

一方、七月二三日、東郷外務大臣から加瀬のもとにもこの件で電報が入った。その内容は次のようなものだ。

「一、最近貴地海軍武官より「ルーズベルト」の東欧の特使 Dullas なるものより確実なる

第三者を介して同武官に対し「日本側に於いて米国と絶対秘密裡に話合の意向あらは華府政府に伝達すべく東京より海軍高官を瑞西に派遣の意図あらは飛行機其ノ他の準備を引き受ける」旨申出た趣を以って措置振清訓越せる処 海軍中央に於いては当方と連絡の上「敵の謀略及離間工作頻に行われ且主目標を帝国海軍に置きあるやに認められるるに鑑み中央としては本件は取り上げざる意向なるに此の種工作に対しては在瑞帝国官憲と密接連絡し周到に観察すへし」との趣旨の回訓を發せると共に本件処理を外務省に一任し来れり

- 一、 就いては委細貴地海軍武官より御聴取相成度（海軍側より更めて同武官に訓電を發すへし）本件 Dullas なる人物の確實性に関する見込（当方調査に拠れば略歴別電第三七一号の如き John Foster Dulles のことかとも思惟し居る処果たして然りや）本件相手方を通し米国当局の和平問題に関する真意を探り得るやに關せる貴見等至急御回電相成度」

とくに重要なのは「最後の本件 Dullas なる人物の確實性に関する見込（当方調査に拠れば略歴別電第三七一号の如き John Foster Dulles のことかとも思惟し居る処果たして然りや）本件相手方を通し米国当局の和平問題に関する真意を探り得るやに關せる貴見等至急御回電相成度」です。至急回答の電報をくれと東郷はいったのですから、状況が状況だけに、当然いまかいまかと待っていたと考えていいと思います。それに加瀬が三〇日に回答したのですから当然よんでいると考えていいと思います。東郷が「至急回電相成度とって」、加瀬が返電したのに読まなかったと考えるなにか理由がありますか。

また、次のような佐藤の電報を引用してあります。

同日（八月四日）モスクワの佐藤は東郷に電報を送り、次のように勸告した。

「ソ連政府が戦争終結の斡旋を引き受くと否とに不拘今次の大東亞戦終決の為には七月二十六日の米英支宣言（ポツダム宣言）がその基礎たること最早動かし難き所（中略）日本の平和提唱の決意が一日も早く連合側に通達せらるれば夫れ丈条件緩和の度を増すこととなる道理なるに反しもし政府軍部の決意ならず荏苒日を空うするにおいては日本全土焦土と化し帝国は滅亡の一途を辿らざるを得ざるべし。（中略）加瀬公使の意見を読んで感極めて深きものあり敢えて卑見を呈す。（註9*）」

この電報は加瀬の七月三〇日付の電報が東郷と佐藤に送られていたことを示しています。実際送られています。そして、佐藤は加瀬の電報を東郷が読んでいることを前提に「加瀬公使の意見を読んで感極めて深きものあり敢えて卑見を呈す」といっています。この重大局面で東郷はじりじりしながら佐藤の電報を待っていたのですから、この佐藤の電報を読んでいます。それによって、ソ連の仲介を諦めて、ポツダム宣言受諾によって英米に降伏することを決意します。この電報に加瀬の電報へのこのような言及がある以上、東郷が加

瀬の電報を読んでいなかったということはあるのでしょうか。仮にあったとして、佐藤の電報を読んだとき、加瀬の電報をチェックせずにはいられなかったと思います。

ソ連との交渉がダメになった以上、天皇制存置ができるかどうかにかかわる加瀬のインテリジェンスがもっとも重要です。これを読んだことが東郷、木戸、天皇に届き、御聖断につながったと東郷天皇の言を引用しながら論証しています。これについては長くなるのでこれ以上拙著から引用しません。

私は、東郷は加瀬の電報をすべて読んだと仮定していませんし、そんな仮定にもとづいた記述をしていません。

私が実際に書いているのは、ポツダム宣言の前後、そしてご聖断の前という重大局面で、東郷は加瀬が送る電報を重視し、自分から加瀬に「本件相手方を通し米国当局の和平問題に関する真意を探り得るやに關せる貴見等至急御回電相成度」という電報を打って問い合わせしていたという事です。問い合わせたおいて、待っていた返事が来たのに、読まないという事があるのでしょうか。繰り返しますが、この局面では加瀬のインテリジェンスがもっとも重要なものでした。

大堀さんは読まなかった可能性があるとお考えでしょうが、この状況ではそっちこそあり得ない憶測です。

平時においては「すべての電報を読んだはずはない」といっても、このような重大時に「すべての電報を読んだはずはない」という推測は通じないと思います。

大堀さんは、私がかなりのスペースを割いて書いているこういった論証過程にはまったく触れず、「竹内のほうが誠実」であるという一方的主観を述べています。長々と根拠をあげてあるのに「根拠がない」というのは、誠実でしょうか。

さらに問題なのは、拙著には副題に「ポツダム宣言はなぜ受け入れられたのか」とつけたほどポツダム宣言受諾のプロセスにスイスの終戦工作がどうかかわったのかを中心テーマにしているのに、拙著を竹内との本との対比という矮小化した枠でとらえています。これは著者としては抗議せざるをえません。拙著は、スイスの終戦工作がワシントンの終戦への動きと連動している、そして、戦後体制に重要な役割を果たすポツダム宣言は、ダレスのスイスでの日本人との接触、ワシントンのグルーとの連携から生まれたのだというこれまでにないオリジナルな知見をしめしています。そのため、最後の三つの章では、スイスの終戦工作とワシントンの和平への動きを、パラレルに追っています。このポツダム宣言作成の動きとの関連においてスイスの終戦工作をとらえるという視点はこれまでなかったものです。

副題になっていることにすら触れず、全体の構成にもふれず、オリジナルな点についてもふれず、スペースを割いて書いてあることも書いてないというのでは、誠実な書評でないばかりでなく、もはや書評とはいえない匿名性に隠れた誹謗中傷だともおもいますが、いかがでしょうか。このような悪意には非常に苦痛を感じます。このサイトの大堀氏の記事にたいして私と同じことをしたら、大堀氏はどう感じるのでしょうか。

<藤村工作の先行研究>

有馬氏はこれを書き上げるに際し、スイスの連邦文書館、アメリカのワシントン公文書館等を訪れているが、評者が15年以上前に冒頭に紹介した「スイス和平工作の真実」を書くためにたどったコースであり、どこか懐かしさを覚えた。

また藤村工作については、評者がそこで紹介した史料にもかなり当たっているようだ。ただし違う箇所を引いて、独自性を出しているように思われる。例えば高木惣吉が戦後藤村にインタビューした記録に関し評者は「東京から返電について6月15、6日と書いた後に箇所に5月25、6日頃と直されているのも意味深長である。」と書いたが、有馬氏は「第2電を6月12日といったあとで、すぐに5月12日といいなおしていることだ」と書いている。もう少し先行研究を素直に紹介、引用しても良いのではないか？付け加えるとウィキペディアの「藤村義一（義朗）」の項目では外部リンク先として以下のように評者のサイトが載っている。

[日瑞関係のページ](#) - 「藤村義一」の箇所に、藤村自身の手記と資料とを比較照合した内容を掲載。竹内修司(2005年)には本サイトが主要参照・引用文献の一つに挙げられている。竹内氏の先述の著作もしくはこのウィキペディア情報から、有馬氏は評者の書いたものに接しているはずである。

後に述べる理由で、別にどっちが、公文書通いが早かったを競うつもりはありませんが、拙著の「あとがき」にもはっきり書いてあるように、私がアメリカ国立第二公文書館に年にほぼ二度通い始めたのは二二年前です。大堀氏は七年もあとですね。しかも、懐かしいということは、そのあとっていないようですね。公文書館の資料は常に新しいものが加わりますから、三年もいかなかったら、研究者なら論文を書けなくなります。私はこれを書いている今もアメリカ国立第二公文書館にいます。

「ワシントン公文書館」と仰っていますが、アメリカ国立公文書館をいつているのであれば、ご存じのようにナショナルギャラリーや自然史博物館とおなじくワシントン DC にあります。しかし、こちらには、マジックとか海軍武官文書とかは所蔵していません。アメリカ国立第二公文書館でしたら、ワシントン DC ではなく、メリーランド州カレッジパークにあります。

ところで、大堀氏は自分のサイトをすべての人が読んでいて、自分のサイトから公文書について知ったと思っているようですが、ためしにここアメリカ国立第二公文書館に来ている学生さんや若手研究者にきいてみましたが、そんなサイト知らないといっています。この答えは大堀さんにとって意外ですか。

マジック、OSS 文書、海軍武官文書、その他は現代史や占領史の研究でごく普通に使わ

れる資料です。学会や研究会の発表を通じてこのような情報はとっくに知れ渡っています。五百頭旗眞氏や秦郁彦氏の時代からスタンダードなものになっています。

今チェックしても、大堀氏のサイトにはこのご両名はまったく登場しませんが、まったく読んだことがないのですか。彼らは私よりも大堀氏よりもずっとまえに、前述資料を渉猟していますが、それでも「自分が先だ」といいますか。

また、「ただし違う箇所を引いて、独自性を出しているように思われる」とお書きになっていますが、本当に同じ文書ですか。おなじコレクションの文書だと意味ですか、それとも同じ文書の「違う箇所」という意味ですか。

そもそも大堀氏の註は **Translation Reports of Intercepted Japanese Naval Attache Messages, 1942-1946** といった極めて大雑把なもので、ボックスナンバーもエントリーナンバーも請求番号もないので、どの文書か特定できません。もっとしっかりした出典の示し方をしてください。これではソースを秘匿しているといわれかねません。コレクションのなかの文書は何十万点もあり、複数のコレクションに、関連する内容の文書が入っていますから、こんなおおまかな情報では同じ文書かどうか確かめようもありません。

それから、大堀氏は知らないようですが、マジックはコレクションが少なくとも三つ以上あって、入っている文書が少し違っています。イギリス公文書館のウルトラになると相当ちがいます。海軍武官文書もおなじです。大堀氏はコレクションが一つしかないとおもっているようですが、私が請求してみたら海軍武官文書は二種類のものでできました。だから、エントリーナンバーやボックスナンバーまで必要なのです。これでも「ただし違う箇所を引いて、独自性を出しているように思われる」と言い張りますか。

さらに、「東京から返電について6月15、6日と書いた後に箇所に5月25、6日頃と直されているのも意味深長である」と自分が先に注目したという部分ですが、もうすこしすなおに拙著をお読みいただいてもいいのではないのでしょうか。

アレン・ダレスが五月末をもってベルンからいなくなっていたという重要な事実を発見したので、この日付の変更の意味を重視しているのであって、大堀氏には、失礼ながら、そのような着眼も問題意識もありません。しかも私は、ダレスがその時期ワシントンにいて、グルーたちと日本に有利になるよう終戦工作をしていたとし、そのあとの終戦プロセスにつなげていっています。この点で、大堀氏の「感想」とは次元がまったく違います。

「独自性を出している」のではなく、根本的に独自なのです。論旨とコンテキストが違っていると引用できませんし、雑談的に紹介する必要もなくなります。

そもそも、資料分析の妙味は、すくない資料から雑な分析をすれば犬に見えていたものが、他の多くの資料を参照し、分析を深めて解像度をあげると、馬だったということがわかることにあります。同じ資料を読んでも、犬だったというのと馬だったというのとでは大きな違いです。写真も解像度がちがえば、まったく別のものとして見られます。私からすれば、失礼ながら、大堀氏は犬すら見えていません。「意味深長だ」でなにが良かったのでしょうか。

「資料を見つけた」で終わるのではなく、それによってより意味のあるなにをいうか、点を線にし、面にするか、主張するか重要なのであって、「先に見つけた、読んだ」は、こどもの宝さがしではないのですから、意味がありません。また、全体としてどういう構成でどのようなオリジナルな知見を示し、どのような論を展開し、結論に導くかが重要なのです。だから、いまもアメリカ第二公文書館などで若い研究者の方が閉館時間までがんばっているのです。点で満足している人はここにはいません。

公文書館などにある資料は大堀氏先に読んだからといって（そうではないことを前にも書きましたが）専有物になるわけでも、著作物になるわけでもありません。

ところで、裏付けをとらず憶測記事をかくことをマスコミでは「とぼし」といいます。「とぼし」をやると、非難されるばかりでなく、会社をクビになるだけでなく、社会的制裁を受けます。

<藤村神話の崩壊？>

藤村証言に入り込んだ脚色に注目して、それを否定するのは評者と同じ手法である。ただしそれはかなり極端で、「藤村ストーリーは、そもそも評価すべき中身はなかった」、「歴史認識を誤らせる躓きの石」と藤村の工作を全否定して結んでいる。

しかし全否定となると、上手く説明できない部分も出てくる。例を挙げると「暗号電報の発信者は（津山重美ではなく）西原（大佐）だった」という項目があるが、有馬氏は「藤村と津山が和平工作をしていたこと自体がおかしい。階級に厳しい海軍ゆえ、百歩譲っても、工作の指揮を取っていたのは西原だった」として、藤村の役割を矮小化している。ここでは西原自身が、戦後海軍同窓会報に書いている回想も根拠としている。（西原の回想を探し出したのは評者が先であるが、これも有馬氏は別の記述、個所を紹介している。）

しかし西原主導とすることの誤りは、評者が「スイス和平工作の真実」ですでに説明している。ここでは次のように結んだ。

「この手記の最大の問題点は、文末に“和平交渉に関する裏話はその詳細を、昭和三十五年頃文芸春秋に載せた事がある”と書かれているものの、記事はどこにも発見出来ないことだ。おそらく藤村の文芸記事のことを指しているのであろう。細部は具体的でかなり正確であったが、西原は藤村の行為を、自分の行為と混同してしまっていると考えて間違いない。」

「藤村証言に入り込んだ脚色に注目して、それを否定するのは評者と同じ手法である」とありますが、大堀氏でなくとも、誰でも同じことをするとおもいます。逆にききますが、ほかにどういう手法がありますか。あまりにもあたりまえの普通のことを「自分の手法」だとする大堀氏の考え方のほうがよほどユニークです。

また、「西原の回想を探し出したのは評者が先であるが、これも有馬氏は別の記述、個所を紹介している」とありますが、これはまさしく前にいった「とぼし」ですね。

西原の手記は『新潮45』の記事を書いたとき、海軍機関学校に在籍していた方から送っていただいたものです。そちらのサイトでチェックしましたがタイトルも発行年も違っています。私がいただいた「技術情報の収集と和平交渉の橋渡し」『鎮魂と苦心の記録』（海軍機関学校、海軍兵学校舞鶴分校同窓会、一九八一年）に収録されている西原の手記はそんなに長い手記ではないので、別の記述、箇所など引用できません。大堀氏が後で述べている文春の記事への言及は、私が入手した手記にはありません。明らかに私は中身が違っています。

また、あとで述べるように、私は大堀さんとは、まったく違う結論を引き出しています。読みと分析が根本的に違うということです。だから「先に見つけた」だけでは意味がないのです。

付け加えれば有馬氏が多用するアメリカ側の文書でも、7月5日付けでゲルベニエッツは、「在スイスの日本の公人の中で、それなりの才幹を持つのは只一人、（中略）藤村義一である。（中略）米内海軍大臣に直接電で間断なく報告を送っている」とあるが、西原の記述は全くない。藤村が主体であったという根拠は他にもあるのだが、これまでにしておく。

この翻訳がおかしいようですが、いずれにせよゲフェルニッツの評価が高かったから、終戦工作の主体だったというのは明らかに論理の飛躍です。このような関係のない事実をいくら並べても意味がありません。

藤村はゲフェルニッツにも沢山電報を打っているとホラを吹いているのでそのようなコメントになっているのでしょう。大堀氏は打ってもいない電報を打っていると嘘をつくことが「終戦工作」だと思っているようですが、それなら藤村は主体です。

それに評価のことをいえば秘書のゲフェルニッツよりダレスの評価のほうが重要です。拙著でも強調していますように、ダレスは、國務省局長と金融関係の契約弁護士という前歴から、スイス公使加瀬と国際決済銀行の北村らを重視しました。また同じくインテリジェンス機関の大物として岡本を重視していました。ダレスの目からみて、海軍中佐、藤村はどう見えたとお思いでしょうか。また、「終戦工作の主体」ならば、なぜさっさとワシントンにいつてしまい、そのあとは全く相手にしなくなるのでしょうか。

「単なる情報とりだった藤村」という項目もある。

そこでは日本側は藤村をただの情報とりとして見ていて、それ以上の役割ではなかったという主張もしている。根拠として引用されているのが、近年話題に上った「海軍反省会」の第5巻である。

発言者である大井篤が東郷外務大臣が次のような発言をしたと述べたことが根拠になっている。

「藤村のラインでダレスと話さえさせておけば (中略)、まあ情報とりでもいいんですが、、、」

「海軍反省会」もスイス和平工作に関すれば、「釈明会」の位置づけであろう。その内容は充分吟味する必要がある。東郷が発したとするこの発言であるが、大井は当事者としてその場にいたのではない。また日本の外務省は終戦の年の7月20日頃まで、ダレスという人物について分かっていない。結論を急げば東郷外相が、このような発言をしたとは考えられない。という訳で「単なる情報とり」と言うのも事実に基づいた解釈ではない。

「日本の外務省は終戦の年の7月20日頃まで、ダレスという人物について分かっていない」ということを「東郷外相が、このような発言をしたとは考えられない」理由にあげてありますが、どうしてそうなるのでしょうか。まさしく結論を急いでしまいましたね。よくお考えになってから判断したほうが良いと思います。

また、大堀には、自分の予断と違う資料や証言がでてくると、資料や証言の方を間違いだと言い張る傾向が見られます。虚心坦懐に資料を読み証言に耳を傾けることが大切です。まず、ダレス (ダラスでもいいです当時の日本人の発音はそんなものです) の名前を知っていれば、ダレスがなにものかわからなくても言及できます。交渉相手の名をダレスと知っているだけで、人物について知らなくても東郷がいったようにいうことはできます。

また、大井がこの反省会で発言しているのは、戦後しばらくたってですから、当然あとでダレスについていろいろ知るようになっていきますので、ダレスに言及してもまったくおかしくありません。

たしかに、オーラルヒストリーというのは、多数の立場の違う人間の証言をクロスチェックするとか、文書記録と照合するとかの作業が必要で、丸のみはできません。しかし、東郷と米内が和平派で密接に協力しあっていたコンテクストがあり、また海軍省の複数の幹部の証言と照らし合わせると、予断なしに考えれば、この証言は信ずるに値します。逆に「事実に基づいた解釈ではない」というのでしたら、これらの複数の証言を全部否定する「事実」を資料で示してください。

また和平工作の日付が1か月ずれている件に関し、有馬氏は新説としてダレスが6月から異動で、スイス支局長から「占領地高等弁務官」となりドイツに向かった。不在のダレスと交渉していた事になるから、1か月早めたのであると言っているが、どうもピンとこない。

ダレスが異動し、管轄外となった以降も、スイスのOSSメンバーはダレスに報告をしてい

る理由もよく分からない。筆者は1か月早めたのは、藤村が自分の先見性を際立たせるための言う自説に留まる。

私はきちんとした資料をもとに根拠をあげているのに、「ぴんとこない」はないと思います。藤村が「自分の先見性を際立たせるために一カ月前倒しした」と、「相手のダレスがいなかったから一カ月前倒しした」では、どちらが藤村の動機をよく説明しているのでしょうか。「スイスのOSSメンバーはダレスに報告をしている理由もよく分からない」とありますが、拙著にも書いてありますようにOSSの報告書は、大統領、陸軍省、海軍省、国務省に配布されています。ダレスの新職は陸軍省と国務省と関係しますので、ダレスも報告書を読むことができます。くわえて、日本側に重要な動きがあれば、終戦にかかわることですから、管轄無視で動くと思いますし、実際動いています。拙著に書いてありますように、7月20日などは許可もないのに任地を離れてポツダムにいき、スティムソンに直訴するという、信じられないこともやっています。拙著のこれらの部分はお読みにならなかったのですか。

さらに戦後藤村は加瀬公使について「無能の人」と書くが、それは自分の工作を「黙殺すべし」と外務省に報告した仕返しと有馬氏は書く。しかし加瀬公使の態度には他の当事者からも疑問の声が上がっている。

朝日の駐在員で良識人と評される笠信太郎は、加瀬の終戦に対する取り組みに「もどかしさを覚えた」と戦後回想している。またもう一人の重要な当事者である北村孝治郎も、「私見だが、加瀬公使から真の協力を得る事は難しい。彼は自ら動くに臆病すぎるからだ」と連絡員であるハックに語っている。つまり加瀬公使に終戦工作の光を当てすぎるのも正しくはないであろう。

拙著は加瀬公使の打った、ダレス・ヤコブソン会談、ヤコブソンのポツダム宣言についての解説が、ソ連大使佐藤にも伝えられ、佐藤をして東郷宛の電報のなかで「加瀬公使の意見を読んで感極めて深きものあり敢えて卑見を呈す」といわしめ、それが東郷をソ連の仲介をまたず、東郷、そして天皇をポツダム宣言受諾による終戦へと動かしたという論を展開しています。打ってもいない電報を打ったという終戦工作ではなく、実際に終戦につながっていくインテリジェンス活動に焦点をあてています。

重要なのは電報を打ったかどうか、それが東郷や天皇をどう動かしたかであって、加瀬がどういうタイプの人間だったか、笠や北村にどう思われていたかはこの際問題ではありません。加瀬は、その性格とは関係なく、電報を打っていましたし、それをモスクワの佐藤大使も読んでいますし、その佐藤が加瀬の電報に言及した電報を東郷も読んでいて、それが終戦につながりました。この事実が重要なので、そこに加瀬の性格うんぬんはここでは関係ありません。加瀬の人柄の好き嫌いで、その予断で、資料がなにをしめしているの

か見失ってはならないとおもいます。私は大堀氏がこのように不誠実で予断にとらわれてしまう人間だからといって、サイトにあげてある記事がすべて虚偽だとか、でたらめだとは思いません。

<朝日新聞チューリッヒ支局>

朝日新聞の支局のメンバーが3名とも OSS と結びついていたという。そして重鎮である笠信太郎について、スイス連邦文書館での入国管理記録から、1943年1月15日にスイスに移り住んだことが確認できたと書いている。

しかし有馬氏がまさに訪問した連邦文書館の笠のファイルには同年7月14日付けの手紙で、「もう何週間がベルリンにいる。(スイスの) 外交官待遇の書類は、到着後送り返した。」と書いている。また同年9月23日に家族に宛てた手紙では「この13日、飛行機でスイスに来た。もう一度ドイツに旅行的に行くかもしれぬが、大体このスイスが活動の本拠になりそうだ。」([「戦時下、欧州からの手紙」](#)より)と書いているので、9月と理解した方が良いのではなかろうか？

私の読んだ笠のファイルは、拙著にも書いていますように、入国管理記録です。したがって、スイスにいつ記録上入国したかを客観的に示す資料として扱いました。戦争中のことです。日本人にかぎらず、実際にスイス入りしたのはかなり前なのに、入国管理記録上の日付が後になっていることはままあります。逆もしかりです。大堀さんのいっているのは、個人的書簡が含まれているというところから、他のファイルだと思われます。

笠にかぎらず、北村や吉村や岡本なども、ベルリンやベルンやチューリッヒ、それ以外都市をたびたび旅行しています。手紙にいまどこどこにいると手紙に書いたからといって、たまたまそこに旅行してただけで、入国管理記録上の国は別だったということもおもいます。また、「[「戦時下、欧州からの手紙」](#)」の記述を根拠にしていますが、往々にしてこういった記憶に基づく主観的な記録は、客観的公的記録と違っていいますので、どちらを選ぶかといえばわたしは公的記録をとります。おなじく『昭和史の天皇2』では吉村が北村の入国時期を一九四三年といっているのを、入国管理記録をもとに、一九四四年だったとしています。これは記録の問題ではなく、吉村の記憶違いだと思います。

そして1943年1月15日に「笹本たちと合流する」とあるが、笹本は1940年4月にブダペストに移り住み、1945年1月にスイスに戻るの、笠がスイスに来た時、笹本はスイスにはいない。

「田口たちと合流する」とすべきでした。これは誤りを認め、お詫びして訂正させていただきます。

またもう一人の支局員田口二郎については「1942年1月15日、東京からスイスに入国して公使館アタッシェになる」とあるが、これも正しくない。田口が遊学先イギリスからスイスに移り住むのは1939年で、以降スイスに滞在している。（「[スイスを愛した日本人](#)」より）

これもまた入国記録からですので、その通りに書きました。「田口が遊学先イギリスからスイスに移り住むのは1939年で、以降スイスに滞在している」は入国管理記録から証明されていることでしょうか。田口はスイスの日本大使館に採用される前にいったん東京に帰らなかったのでしょうか。帰っていればつじつまがあります。ご自分の書いたもの以外の客観的かつ公的資料をお示しいただければ確認します。

有馬氏は最後にスイスに移り住んだのは笹本ではなく、笠という理解のもと、史料にある「新しいエージェント」は笠を指すとしているが、大丈夫であろうか？

拙著の終章で、笠が戦後ダレスの部下だったポール・ブルームと「火曜会」を開催し、当時の日本政府のシンクタンクとなっていた学者をあつめて政治的インテリジェンスを集めていたことを書いています。終章はお読みにならなかったのですか。戦後ブルームとの関係が続いていたのは、藤村と笠だけだったとわかっています。拙著に書いてあるようにブルームはCIA設立後ダレスのために働きます。これで「大丈夫」ではないですか。大堀さんのほうも予断ではなく「大丈夫ではない」という根拠をあげてみてください。大堀氏は、自分の予断と違う客観的証拠をつきつけられると、感想や主観に逃げ込む癖があるようです。

また田口は、日本がポツダム宣言を受け入れる大きな拠り所となった、アメリカの対日プロパガンダ、ザカイラス放送に名前が登場するそうである。

1945年6月9日の放送で、「田口の東郷外務大臣宛ての書簡に言及しながら、ドイツの二の舞にならないよう早期に降伏することを呼びかけた」という。

拙著にザカライアスの **Secret Mission** が注釈にあげてありますが、お読みにになりましたか。お読みになれば「確かにそういう放送があったのであろう」という憶測が確信に変わると思います。註にあるソースにあたって裏をとることなく憶測をいっているのもこれも「とばし」ですね。ザカライアス放送は有名です。また拙著でも書いていますように終戦のプロセスできわめて重要な役割を果たします。ゆえに、ザカライアス放送の音源は日本でも複数のテレビ局が入手していて、それを使ったテレビ番組さえ複数放送されています。自分の持っている知識で十分だとはおもわず、「とばし」をせずに、まず私が注釈にあげてあ

る本を読んでみてはいかがでしょうか。ここが引っかかっているのでしたら、せめて註釈もじっくりよんでから「書評」をかくのが誠実な人間のやることだと思います。

これはダレスとザカライアスの繋がりを証明する貴重な証拠として、本書では3度ほど、取り上げられている。確かにそういう放送があったのであろう。

しかしながら田口の東郷外相宛ての書簡というのは、ありえない事ではないか？26歳でスイスに来た田口と東郷外相との接点は見つからない。面識もない外相に一現地採用のジャーナリストが何かを書き送るであろうか？提言を書いたとしても、外相の目に留まる可能性は皆無であろう。

また「書簡」を送ったと書いているが、ドイツの敗戦時、日本と欧州間の郵便、伝書使など一切機能していない。

こうした精度の低い情報が、ダレスからザカライアスに直接伝えられたのであろうか？ザカライアスがOSS文書に田口の名前を見てつまんだだけではないのか？この疑問はすでに「昭和史を動かしたアメリカ情報機関」に対する書評でも、評者は指摘している。

ここでは、私に向けた批判になっていますが、「田口の東郷外務大臣宛ての書簡に言及しながら、ドイツの二の舞にならないよう早期に降伏することを呼びかけた」のは私ではなくて、ザカライアスです。ですから、その文言についての批判はザカライアスにいったらいいのではないかと思います。私はザカライアスが実際にこういったので、このように記述しているだけです。ほかのところでも同じ手法で、私に責任がないところで、私に責任を転嫁する手法がみられます。

また、「しかしながら田口の東郷外相宛ての書簡というのは、ありえない事ではないか？」とお書きになっています。

ではおききしますが、なぜ、ワシントンで対日放送していたザカライアスが田口の東郷宛の手紙を放送で引用しているのでしょうか。なぜ大堀氏がないと思っているものが存在するのでしょうか。現実としっかり向き合ったほうがいいと思います。やはり大堀さんは、自分の予断とちがう資料がでてくると資料の方を否定するのですね。

ザカライアスはながながと田口の手紙を引用していて、でたらめとは考えられません。東郷宛に実際に郵送したか、電報で打ったかは別として、たしかに田口は東郷宛に手紙を書いていて、田口がOSSに渡したか、あるいはOSSが盗んだかどうかは別として、OSSの手にわたっていて、それをザカライアスが対日ラジオ放送に引用したことは事実です。前にもいいましたが、まずザカライアスの本を読んだらいかがですか。

この時期のOSS文書に田口のこととはでてこないのので、大堀さんが憶測しているようにザカライアスがOSS文書を読んだのではなく、この時期にワシントンに行っていたダレスが直接もっていったと考えられます。拙著でもこのことをもってダレスがワシントンに着いた日

付を絞り込んでいます。この部分はお読みいただけただけでしょうか。

<結論とその出典>

同書には研究論文のように、各所でしっかりと出典が記されている。しかし重要な所でそれが見つからない。ポツダム宣言の受諾を主張していた東郷外相に関し、「キナ臭いと思った東郷は、5月14日以降ヨーロッパの中立国の公使館などに、英米がどのような終戦条件を考えているか探りを入れるように命じていた。実際、5月7日から27日までに、ポルトガル、スイス、スウェーデン、バチカンの公使館員が現地のOSS代表と接触して和平条件を聞き出そうとしている。」という興味深い記述があるが、この出典がはっきりしない。

これは側註に示してあります。以下の通りです。

東郷重徳『時代の一面』中公文庫（一九八九年）四七九頁「バチカン工作」原田公使発東郷外務大臣宛六月三日発六月五日発『大東亜戦争関係一件「スウェーデン」、「スイス」、「バチカン」等に於ける終戦工作』一一七頁、**Alleged Japanese Peace Feeler, Memorandum of Information for the Chief of Joint Chiefs of Staff, May 12, Portugal-Possible Japanese Peace Feelers, Memorandum of Information for the Chief of Joint Chiefs of Staff, June 1, 1945, May 31, Washington Director's Office, Records of OSS, M1642, RG 226(National Archives II, USA)**。以下M1642とする。なお、スウェーデンでOSSの協力者エリック・エリクソンとの接触を報告したのは五月一七日、「バグ」工作について電報をやり取りしたのも5月一〇日のことである。

本文のすぐ横の側註で、示してあるので、見落とすはずがないとおもいますが、どうして「はっきりしない」と事実と反することを述べているのでしょうか。まったく理解できません。不誠実極まりないですね。拙著を読んだ読者はこのコメントを読んで異様に感じるとおもいます。このように量が多い側註ですので、ページの半分を占めていて、見落とす人はいないからです。

一方同書においてスイスでは「5月11日、ダレスの名を受けてハックが駐スイス公使の加瀬俊一と接触していた」と接触がアメリカ側のイニシアチブであることを述べてもいる。有馬氏はこの時の中立国からの回答で、東郷が「アメリカは無条件降伏しか認めない」という認識に立ち、それが彼のポツダム宣言受諾の基になっていると導く重要なポイントとしているが、ここでも中立国からの回答から、東郷がそのように理解したと判断できる史料は示されていない。

「中立国からの回答から」とありますが、拙著にはそんなことは書いていません。中立国でOSS局員と接した日本の公使館員の報告から東郷はアメリカが無条件降伏しか認めないことが知ったという趣旨のことは書いています。予断をもっていると、ちゃんと読まないだけ

なく、誤読までするのですね。

中立国の日本公使館員の「アメリカは無条件降伏しかみとめない」という報告書は、前の註で示してあります。彼らの報告書は、自分で要求したくらいですから、東郷は読んでいます。読めば、そのように判断します。他になにが必要でしょうか。自分の間違っただけに合致するものですか。

ちなみに東郷は五月までは、ソ連に和平の仲介を頼むには遅すぎるし、危険すぎると思っていたのに、六月以降天皇の要請もあって、ソ連を仲介として英米と和平を講じるという方針に転じていきます。これはどの資料というより、日本側の終戦の動きとして拙著の註釈にある「終戦史録4」に関連文書が沢山はいついて、それらからたどることができます。大堀さんも、コメントを書くまえにこれを読むべきです。もっとも、ほかにもこのことを書いた本はいっぱいありますが。

そして「このハック、ダレス、ヤコブセン、吉村、岡本、加瀬らが数年をかけて確立した日米間のトップをつなぐコミュニケーションのチャンネルが無ければ、そもそもこのような終戦を巡るコミュニケーションもなく、したがってドイツのように軍事力と政治機構の完全なる消滅によってしか戦争は終わらなかった。」と書いているが、ここまで言い切つて良いかは、議論の余地があるところであろう。

これも、言い切つて悪い理由を、具体的に言ってください。議論の余地など残さずはつきり反証をあげてください。反証をあげられないとき「議論のよちがあるところである」と曖昧に逃げる傾向がありますね。

また戦後の話であるが、笠は戦後になってもダレス、CIA との関係があったので藤村、津山、北村、吉村などに、つねづね自分がスイスで終戦工作に関わった事を口止めしていた」とあるが、この出典も知りたいところだ。

「終章」の註にあげてあるソースにあたれば見つけられます。前にも言いましたが註の資料にあたってください。そうしていればこのようなコメントを書かなくてもよかったですと思います。

<終わりに>

正直に申し上げて、かなり細部に渡った書評となった。ドイツ語の慣用句に「スープの中の髪の毛を探す」（あら捜しをする）というのがあるが、その感もぬぐえい。しかしやや行き過ぎた部分は戻したい、というのが評者の主旨である。そしてスイスでの和平工作の真

実に、さらに少しでも近づければ本望である。

(2015年8月12日 終戦記念日3日前に)

私も同じ思いから反論文を掲載させていただきました。とくに、せつかく大堀氏のサイトを訪れて、記事を読んでもらっている読者に対してこの不誠実な「書評」は信頼を裏切るものだと思います。非常に残念です。